



佐藤栄佐久氏 (郡山の自宅で)

# 語る!

特別寄稿

前福島県知事 佐藤栄佐久氏

## 夢の水族館 アクアマリン

二〇一一年三月十一日。震度9の大地震――。実は、その二週間後の三月二十六日は東電福島第一原発の1号機が稼働してから四十周年を迎える日でした。いわき市議の佐藤和良さんたち「ハイロアクシオン実行委員会」が、廃炉にすることを訴えている中で、二月七日

## 世界に通用する施設を

## 「福島海返してほっすん」

に国が十年の延長を決定してしまいました。同二十六日のイベントには飯田哲也さんや私も参加する予定でしたが、3・11事故のためもちろん、中止せざるを得ませんでした。いわきの皆さんからは避難したほうがいいかどうかなど、たくさん電話を頂きましたように、滅茶苦茶な混乱状況でした。

### 館長、一人で洗いの

四月十一日、自宅でシュピーゲルというドイツの雑誌の取材を受けていた時、大きな揺れが起こり、カメラマンは飛び出し、戻ってこないほどの余震が起こり、いわきでは大変な被害が出ました。すぐにでもいわきに飛んで行きたい気持ちでしたが、海外からの取材などの日程が立て込み、実際にお邪魔できたのは四月二十九日でした。田畑や道路の段差に驚き、一瞬の津波の破壊力で全て洗

い流されてしまった海岸線を見舞いながら、最後に(小名浜港の)「アクアマリンふくしま」にたどり着きました。そのとき、一人で津波で被害を受けた小さいものを洗っていた安部義孝館長を見て、館の再開は間違いないと感じました。

知事に就任すると同時に、小名浜のJC(青年会議所)の仲間が毎年、知事室に訪れました。後に、いわき・ら・ミュウで水族館の先導をした先輩の井澤哲雄さん、県議員になられた小野民平、吉田弘さん、そして、松本茂、長瀬金平、水野汎幸、大橋錦一、里見潤さんなどです。皆さん、福島県の海の玄関口の小名浜開発について熱っぽく語られました。

ですから、小名浜港の1、2号埠頭の再開発、いわゆるウォーターフロントの形成には、いわき市とともに、私も真剣に取り組みました。

一九九四(平成六)年には日米知事会議への出席を機会に、ボルチモアとボストンに足を延ばし、ボルチモアの水族館やインナーハーバーという再開発地区、ボストンのクインシーマーケットと水族館などを視察してきました。

私が最初にアメリカに行ったのは一九六五(昭和四十)年でした。その時訪れたサンフランシスコのフィッシャーマンズワーフの、あまりものさびれ方が記憶にありました。このため、ボルチモアやボストンのウォーターフロント開発には感心し、魅力ある施設を複合的に構成していること、さらに官民の協力体制が極めてうまく行っていることを肌で感じ、視察後、いわき市文化センターでその報告会を兼ね、講演させていただきました。

そうした体験から私はただ水族館を作るだけではだめで、当時、完成に向かっていた、いわき・ら・ミュウを含め、複合的なエリアを形成する重要性と、小さくとも世界に通用する水族館を作ろうと力説して、それには世界レベルの館長を見つけるように、と県の職員にハッパをかけました。これが、安部館長との出会いになります。

安部さんは皆さんもご存じの通り、アクアマリンをシラカンズ研究のメッカにするなど、この世界の第一人者です。また、今回の震災でクウェートからたいへんな寄金が寄せられたのを見てもお分りの通り、その人脈は世界に広がっています。

私が、「ただの水族館ではだめだ、日本のどこにもない、質の高い水族館にしてほしい」と、予算も考えずに言うものですか、それならと、安部さんのご案内でモントレール水族館を二〇〇三(平成十五)年に視察に行きました。



20歳で1haの有機農業を始め、20年後の当時、1万haの農場にした館長のご主人の友人夫婦と

部さんのご友人です。規模は比べものになりませんが、同水族館の運営は、膨大なボランティアの参加が基盤となっており、私が考えていた住民参加の姿でした。そういえば、ボストン視察時、湾内クルーズをした時も、私たちの案内してくれた青年が、「ぼくは市役所の職員なんだけど、友だちをたくさん広げたいから、クルーズのボランティアをしている」と言っていました。

どれだけ深い絆を結んでいるかにあるのですから。あの時の視察は、ジュリー館長のご主人の紹介で、米国の最大の有機野菜栽培メーカー、「アースバウンドファーム社」を訪ねて、エコ農業の実践を学びました。三年間にわたって合成肥料を使用しない土壌で栽培する、遺伝子組み換え野菜は扱わないなど、「エコ農業」の基準を厳格に守りながら、業績を伸ばしているのには感服しました。

有機農作物を中心とした環境共生型農業と、「農業と漁業は繋がっていること」も実感でき、当時、完成間近の県の農業試験場の開場にも役立ちました。

### 「必ずよみがえる」

アクアマリンがいち早く再開できたのは何よりのことでしたが、今、福島海の現状を考えると、怒りというよりやりきれなさで、いっぱいになります。魚を獲ることもできない、泳ぐこともできない、潮だまりの生き物たちを追うこともできない、砂浜に寝転ぶこともできなくなっただけの海。

私なんかより、いわきの皆さんの思いはどれほどのものがあるのでしょうか。「何があっても安全です」。東電の言葉が真実であつたらどんなによかつたか。しかし、このままあきらめるわけにはいきません。福島は、福島海は、必ずよみがえる。千年かかっても、二千年かかっても双葉のマチや村を戻してほしい、福島海を返してほしい、と私は訴え続けます。

そのためには、アクアマリンの役割は、もっともっと大きくなったと私は思います。安部館長と、地域のボランティアの皆さんとこれからも力を合わせて、いわきの海の素晴らしさを語り続けて行ってほしいと思っています。それが私の祈りです。

|| 続く

\* 題字は、石川進さん(本誌「私の博物誌」執筆)

### 著者プロフィール 佐藤 栄佐久 (さとう・えいさく)

1939(昭和14)年6月24日生まれ。福島県郡山出身。県立安積高校、東京大学法学部卒。青年会議所活動などを経て83年の第13回参議院選挙に自民党公認で出馬、当選。88年、参議院議員を辞職して同県知事選に出馬、以後、5期連続当選。

知事在職中は、教育、環境問題に尽力する一方、東京一極集中、道州制などについて否定、さらに、政府、電力会社が進めるプルサーマル計画の導入についても反対を唱えるなど、“戦う知事”として県民の人気を集めた。ところが、県発注のダム工事に伴う「汚職事件」に関与したとされる実弟の逮捕によって、県政を混乱させた責任をとり、2006年9月、5期目の任期途中で辞職。その後、自身も逮捕される。12年10月、最高裁は弁護側、検察側双方の上告を棄却、懲役2年・執行猶予4年の最高裁判決が確定した。

☆ 高裁の判決は、「有罪」とする前提がすべて崩れているにもかかわらず、「無形のわいろ」や「換金の利益」といった従来の法の概念にはない不思議な理論と論法で「有罪」とした。この結果、「罪自体が不明」とし、「冤罪」を指摘する声も大きい。

☆ 著書に、『知事抹殺一つくられた福島県汚職事件』などがある。現在は、全国各地で国の体制・体質、原発問題などについて講演活動を展開中。